

# バウムガルテン『形而上学』（第四版）

## 「経験的心理学」訳注

### ——その2——

樋 笠 勝 士  
井 奥 陽 子  
津 田 栞 里

#### まえがき

本訳注は「バウムガルテン『形而上学』（第四版）「経験的心理学」訳注——その1——」（『成城文藝』233/234号）に続く箇所を訳したものである。バウムガルテンは、「経験的心理学」において領域別的重要な能力論を展開しているが、その端緒は「感官（sensus）」の洞察である。「形而上学」という存在論の学的営為の中で認識論を扱うのはアリストテレス『形而上学』以来の伝統的な学術スタイルであるが、それが能力論であることも、感官から出発する認識論であるのも同様に伝統的である。勿論、アリストテレス流の伝統では、感官による認識内容は、その上位の能力によって再処理されるが故に、高度の知性的な認識に至る過程は、上昇且つ抽象の過程であり、また知識の価値化の過程でもある。しかし、バウムガルテンは、特にライプニッツにおける「微小表象」の認識論的価値の思想の影響を受けつつ、下位認識論を下位と定位しつつも、感覚に独自の認識論的意義を認める。バウムガルテンは言う。「あらゆる感覚においては、何か不明なものがある、つまり判明な感覚においてさえ、何か渾然としたものが常に混入している」（§. 544）。この「何か渾然としたもの（aliquid confusiois）」の意義が、バウムガルテンの「感性論（aesthetica）」としての「美学（aesthetica）」を成り立たしめているのである。更に、感官は身体の状態を捉える「外的感官」と、魂の状態を捉える「内的感官」とに分かたれるも、感官は常に

「現在の状態」を感覚するのだから、「感覚内容は世界全体のなかで最も真であり、それらのいずれも感官の欺きではない (§. 546)」。現実的な感覚経験の真という考え方もまた古典古来の伝統的なものである。その一方で感官の働きを阻む様々な事象によって生じた「感官の欺き」という結果も、或いは「脱自」も「眩暈」も「失神」も、同じ感官の経験として等しく描くバウムガルテンは、明らかに感官を経験に即して客観的にそのもの自体として評価しようとする立場に立っていると言える。いわば、感官は人間的な生においては知識獲得の始原であると共に、理性の経験とは別の有意義な経験を形づくることで、人間的な生の全体を構成する価値的な能力なのである。本訳注においては、このような意味で、カント哲学前夜の、そして近代美学の夜明けの時代における、感官による感覚的認識論が扱われる。

さて、本訳注の全体的な目的及び原典等に関する凡例については「バウムガルテン『形而上学』（第四版）「経験的心理学」訳注——その1——」の「まえがき」を参照されたい。なお、原典の原注については、現代のドイツ語の正書法と異なる場合や、版のあいだで表記が異なる場合もあるが、本訳注では第四版の表記に従った。諸版のあいだでの本文の異同については、英訳の校訂にも記載されず、且つ誤植やコンマの変更など些末なものでない限り、訳注で指摘することとした。

本訳注に関する活動の経緯について記しておきたい。本訳注の活動は、2015年2月以降「バウムガルテン読書会」によって始まり、『形而上学』ラテン語原典（オルムス社第七版）を訳出する会合を重ねた。その主要な参加者のうち、トマス形而上学の立場から建設的な意見を述べてきた和田史比呂氏（慶應義塾大学大学院文学研究科博士前期課程）が2016年3月末に夭折するという予想外の出来事が起こった。和田氏の意見がなければ進展しなかったことも多く、彼の喪失と不在はとても悲しく残念でならない。本読書会に多大な貢献を為してきた和田氏に対して、われわれは深く哀悼の意を表したいと思う。

読書会はいったん停止することになったが、故人の意志に敬意を表して踏みとどまり、再開することとなった。他方で、2016年4月より、樋笠が東京大学大学院人文社会系研究科の原典講読を担当する機会を得たので、そこでバウムガルテン『形而上学』の「経験的心理学」におけ

る「感官」の箇所を講読することにし、これと並行して読書会を実施することとなった。東京大学の授業では、美学芸術学研究室に属する大学院生及び学部生の有意義な意見をもらうことができた。彼らには感謝の意を表したい。

なお、以上の読書会や授業とは別に、樋笠と津田は滞独中の井奥とネットを通じた翻訳研究会を月2回程度開き、討議の上で本訳注の作成にあたった。

### 第三節 感官

#### §. 534

私は、自己の現在の状態を思考する。したがって、私は自己の現在の状態を表象する、すなわち《私は感覚する》<sup>a</sup>。私の現在の状態についての表象内容、すなわち《感覚内容》<sup>b</sup> (仮象)<sup>1)</sup> は、世界の現在の状態についての表象内容である (§. 369)<sup>2)</sup>。したがって、私の感覚は私の身体の位置に応じて表象する魂の力によって (§. 513) 現実化される。

<sup>a</sup> ich empfinde. <sup>b</sup> Empfindungen.

#### §. 535

私は感覚する能力を (§. 534, 216)、すなわち《感官》<sup>a</sup>をもつ。感官は、私の魂の状態を表象する《内的感官》<sup>b</sup>であるか、私の身体の状態を表象する《外的感官》<sup>c</sup>であるかのいずれかである (§. 508)。それゆえ感覚は、内的感官を通じて現実化された《内的感覚》(狭義の意識)であるか、外的感官によって現実化された《外的感覚》であるかのいずれかである (§. 534)。

<sup>a</sup> der Sinn. <sup>b</sup> der innre. <sup>c</sup> die äusre Sinnen. <sup>d</sup> eine innre. <sup>e</sup> eine äusre Empfindung.

#### §. 536

外的感覚が身体の諸部分の適合した運動と共に現存するとき、その諸部分は《感覚器官》<sup>a</sup> (感官の道具) である。感覚器官を通じて、私は次のような感覚する能力をもつ。(1) 私の身体に触れるあらゆる物体を感覚する能力、すなわち《触覚》<sup>b 3)</sup>、(2) 光を感覚する能力、すなわち《視覚》<sup>c</sup>、(3) 音を感覚する能力、すなわち《聴覚》<sup>d</sup>、(4) 鼻のなかへと立ちのぼる物体の匂いを感覚する能力、すなわち《嗅覚》<sup>e</sup>、(5) 口腔内部で溶かされた風味を感覚する能力、すなわち《味覚》<sup>f</sup>である。

<sup>a</sup> Werkzeuge der Sinnen. <sup>b</sup> Gefül. <sup>c</sup> Gesicht. <sup>d</sup> Gehör. <sup>e</sup> Geruch. <sup>f</sup> Geschmack.

#### §. 537

感官の道具が適切により大きく動かされるほど、〔外的〕感覚はいっ

そう強く、いっそう明瞭になり、感官の道具が適切により小さく動かされるほど、外的感覚はいっそう弱く、いっそう不明になる (§. 513, 512)。構成されたもの<sup>4)</sup>が、明瞭に感覚されるために適切な仕方、感官の道具をなおも動かすことができるような領域は、《感覚の圏域》<sup>a</sup>である。感覚の圏域のなかで〔感官の道具を動かすことに〕最も適切な領域は、《感覚の点》<sup>b</sup>である。

<sup>a</sup> eines jeden Empfindungs-Kreiss, <sup>b</sup> eines jeden Empfindungs-Punct.

#### §. 538

感覚対象<sup>5)</sup>がより小さく、感覚の点からより離れているほど、それらについての感覚はいっそう不明に、いっそう弱くなる。感覚対象が、感覚の点からより近く、より大きいほど、それらについての感覚はより強く、より明瞭になる (§. 537, 288)。

#### §. 539

感官が最小であるとすれば、それは最も近く最も適切に現前しているようなただ一つの最大のもを、最小の程度の真理と光と確実性において、表象する場合であろう (§. 531, 538)。それゆえ感官は、より多くより小さくより遠くの方がより適切ではない仕方〔感官の〕道具を動かすときに、そのようなものどもを、より真に、より明瞭に、より確実に<sup>6)</sup>表象するほど、いっそう大きくなる (§. 219, 535)。

#### §. 540

より優れた感官は《鋭い感官》<sup>a</sup>と、より劣った感官は《鈍い感官》<sup>b</sup>といわれる。感官の道具〔organa sensuum〕が、適切な動きにより適しているほど、あるいはより適したようにされるほど、外的感官はいっそう鋭くなるか、あるいはさらにいっそう鋭くされる。感官的道具〔organa sensoria〕が、適切な動きにより適していないほど、あるいはより適していないようにされるほど、外的感官はいっそう鈍くなるか、あるいはさらにいっそう鈍くされる (§. 537, 539)。

<sup>a</sup> scharfe, <sup>b</sup> stumpfe Sinnen.

## §. 541

感覚の法則〔lex〕は次のとおりである。〈世界の状態が互いに継起し、私の状態が互いに継起するように、現在の世界や私の状態についての諸表象は相互に続くだろう（§. 534）。〉それゆえ、内的感覚の規則〔regula〕は次のとおりである。〈私の魂の状態が互いに継起するように、現在の私の魂の状態についての諸表象は相互に続くだろう。〉外的感覚の規則は次のとおりである。〈私の身体の状態が継起するように、現在の私の身体の状態についての諸表象は相互に続くだろう。〉

## §. 542

感覚内容は、〔それ以外の〕他の個々の知覚内容に比べて大きな強力さをもつ（§. 512, 517）<sup>7)</sup>。それゆえ、感覚内容は他の個々の知覚を不明にする（§. 529）。しかしながら、或る多くの感覚が同時にとりあげられたならば、それはしかじかの感覚よりも、特により弱い感覚よりも強くなりえ、今度はしかじかの感覚を不明にしうる。それどころか、或る一つの感覚は、他のより強い感覚によって、あるいは個々の場合ではより弱いと同時にとりあげられるとより強くなるような他の多くの感覚によって、不明にされうる（§. 529, 517）。

## §. 543

外的感覚は次の場合により容易になる。(1) よく備えられた道具の外的感覚である（§. 536）。(2) 外的感覚が感覚の圏域にあり、それどころか、(3) 可能なかぎり感覚の点にある（§. 537）。〔感官の〕道具における運動をより適合した仕方で喚起させるために、物体が(4) 質の点でも（§. 536）、(5) 量の点でも（§. 538）、より適切に動かされる場合。(6) より強い異種の感覚内容が妨げられている場合、それだけでなく、(7) 個々の感覚内容としてはたしかに幾分より弱いものの、しかし多くの感覚内容が妨げられている場合、それどころか、(8) 全く異種の他の知覚内容さえ非常に妨げられている場合（§. 542）。外的感覚は次の場合に妨げられる。(1) 感官的道具が妨げられることによって、外的感覚が適合した仕方で動かされない場合。(2) 感官的道具が少なからず塞がれることによって、外的感覚がより少なく動かされる場合（§. 537）。(3) 感覚されうるものが、取り去られる場合や、(4) 小さくされる場合

や、(5) まったく妨げられて現前しない場合。(6) より強い感覚が喚起される場合。個々の感覚内容あるいは知覚内容としてはより弱い、同時にとりあげられたものとしては (7) 多くの感覚内容あるいは (8) 多くの知覚内容が、妨げられるべき感覚を不明にするほど、注意を分散させる場合 (§. 542, 221)<sup>8)</sup>。

#### §. 544

感官はこの世界の個々のものどもを表象し、つまり汎通的に規定されたものどもを表象し (§. 535, 148)、汎通的に規定されたものとして [ということは] つまり普遍的な連結において表象するが (§. 357)、他方で連結は、特に関係的な連結は、連結されたものどもの二項なしには表象されえないのだから (§. 14, 37)<sup>9)</sup>、あらゆる感覚においては個々のものどもが感覚内容や感覚対象と連結されたものとして表象されるとはいえ、しかし明瞭には表象されず、つまり大部分と大多数が不明な仕方では表象される。したがって、あらゆる感覚においては何か不明なものがあり、つまり判明な感覚においてでさえ、何か渾然としたものが常に混入している。よって、あらゆる感覚は下位認識能力をとおして形成されるべき感性的知覚である (§. 522)。《経験》<sup>a</sup>とは感官をとおした明瞭な認識であるから、経験を収集し叙述する美学は《経験的美学》である。

<sup>a</sup> Erfahrung.

#### §. 545

《感官の欺き》<sup>a</sup>とは、感官をあてにして誤った表象である。それらの欺きは、感覚内容それ自体であるか、感覚を前提とする推論であるか、取り違えという過誤を通じて感覚内容とみなされた知覚であるかのいずれかである (§. 30, 35)。

<sup>a</sup> Betrug der Sinne.

#### §. 546

感覚内容そのものは身体や魂あるいは両者の現在の状態を表象するのだから (§. 535)、内的な感覚内容は、外的な感覚内容と同じように現実的なものを知覚し (§. 205, 298)、そこから可能的なものども (§.

57) をも、まさにこの世界の可能的なものども (§. 377) をも知覚する。したがって、感覚内容は世界全体のなかで最も真であり (§. 184)、それらのいずれも感官の欺きではない (§. 545)。したがって、たとえ感官の欺きが推論にあるとしても、その過誤は形式あるいは別の前提に隠されている。もし感官の欺きが、取り違えという過誤を通じて感覚とみなされた異種の知覚であるならば、判定者の軽率さによって二重の誤謬が生じるが、容易に第二の場合へ引き戻される (§. 545)<sup>10)</sup>。

#### §. 547

《欺瞞》<sup>a</sup> とは、感官を欺くための技巧である。もし欺瞞から感官の欺きが生じるならば、それは《効力をもち》<sup>b</sup>、もしそうでないならば《効力をもたない》<sup>c</sup>。したがって、人が感覚と共通する項辞<sup>11)</sup>をもつ多くの偏見に囚われているほど、取り違えという過誤に用心しないほど、その人のもとではいっそう多くの欺瞞が効力をもちうる (§. 545)。あらゆる偏見と取り違えという過誤から自由な人のもとでは、あらゆる欺瞞は効力をもたないであろう (§. 546)。

<sup>a</sup> Blendwerk der Sinne. <sup>b</sup> kräftig. <sup>c</sup> unkräftig.

#### §. 548

以下の命題は、感官の欺きに相応しい大前提命題であり (§. 546)、それゆえまた効力をもつ欺瞞に相応しい大前提命題である (§. 547)。[1] 私が経験しない<sup>12)</sup> ものつまり〈私が明瞭に感覚しないものは何であれ (§. 544)、存在しない——すなわちこれは《聖トマススの偏見》<sup>a 13)</sup> である——あるいは不可能である。〉[2] (部分的に) 〈他の表象と同一であるものは何であれ、[同じ] その知覚そのものである。〉[3] 〈共に現存する、あるいは互いに継起するものどもは、それらのうちの一方が他方へ実際に影響を及ぼす。すなわち、この後に生じた、したがってこれのゆえに生じた、という詭弁である。〉

<sup>a</sup> das Vorurtheil des Thomas.

#### §. 549

様々のより強い知覚が、より弱い知覚を不明にするのと同じ理由によって (§. 529)、様々のより弱い知覚は、より強い知覚を描き出す

(§. 531)。それゆえ、或る対象についてのより弱い知覚に継起している様々のより強い明瞭な知覚は、まさに知覚が新しいということのゆえに、明瞭な知覚の領野において、よりいっそう統覚される (§. 529)<sup>14)</sup>。したがって、様々のより弱い感覚に継起しているより強い明瞭な感覚は、まさに新しさによって描き出される (§. 542, 534)。それゆえ、より弱い対立するものどもは事物を描き出す (§. 81, 531)。〈対立するものどもは、互いに並置されるときには、いっそう輝き出す。〉

#### §. 550

もし感覚が——それが観察されるかぎりで——まったく同じものとして、無媒介的に互いに続いている多くの全体的知覚のうちに含まれるならば、その感覚は新しさという光を〔互いに続いているうちの〕第一の全体的知覚のうちにもつ (§. 549)。この光は後続する全体的知覚において部分的になくなり、第三の全体的知覚においてはいっそうなくなり、そのようにして続く。それゆえ、他のものによって描き出されないかぎりは、感覚は第二の全体的知覚においてより明瞭でなくなり、第三の全体的知覚においてはさらに明瞭でなくなる。感覚をいっそう不明にするようなものに常に感覚が継起するからである (§. 529)。したがって、長いあいだ同じである感覚内容は——それらが観察されうるかぎり——まさに時間にともなって不明にされる (§. 539)<sup>15)</sup>。

#### §. 551

感覚内容は、等しい強力さのまま持続しない (§. 550)。したがって、感覚内容は可能なかぎりでも最も強くなったならば、〔その後は〕弱まっていくな (§. 247)。

#### §. 552

私が外的に明瞭に感覚しているあいだ、《私は目覚めている》<sup>a)</sup>。私が外的に明瞭に<sup>16)</sup> 感覚し始めるとき、《私は目覚める》<sup>b)</sup>。もし個々の感覚内容が健康な人における通常の明瞭性の程度をもつならば、その〔感覚内容をもつ〕人は《自己を統御している》<sup>c)</sup> と呼ばれる。もし個々の感覚内容のうちの一つかが、残りの感覚内容を著しく不明にするほど、或る人のもとで生動的になるならば、その〔感覚内容をもつ〕人は《自

己の外に捕らえられている》<sup>d</sup>（我を忘れている、自己のもとにいない）。  
内的感覚によって自己の外に捕らえられている人の状態は、《脱自》<sup>e</sup>（幻  
視、衝き動かされた精神<sup>17)</sup>、精神の離脱）である。

<sup>a</sup> ich wache. <sup>b</sup> ich erwache. <sup>c</sup> so sagt man [,] er sey bey sich selbst,  
seiner mächtig. <sup>d</sup> so kommt er von sich, so wird er ausser sich gesetzt.  
<sup>e</sup> eine Entzückung.

#### §. 553

魂の自然的な脱自は、魂の自然本性によって現実化されるであろう  
 (§. 552, 470)。魂の外自然的な脱自は、魂の自然本性によって現実化  
されないのである (§. 474)。脱自がすべての自然本性によって現実化  
されなければ、超自然的であろう (§. 474)。奇跡的な脱自は可能であ  
り (§. 475, 552)、仮定的にも可能である (§. 482-500)。

#### §. 554

目覚めている人の感覚内容がもつ明瞭性の程度が、飲酒のせいで脳へ  
と上昇していく蒸気のために著しく減少しているならば、その人は  
《酔っている》あるいは《酩酊している》<sup>a</sup> だろう。病気のせいで同じこ  
とが生じるならば、その状態は《眩暈》<sup>b</sup> といわれ、それは単純な眩暈  
であるか、暗闇の眩暈すなわちスコトミアであるかのいずれかである<sup>18)</sup>。

<sup>a</sup> trunken, <sup>b</sup> Schwindel.

#### §. 555

明瞭な外的感覚内容がなくなるとき、身体生命運動は、あるいは観  
察されるかぎりではほとんど同じままである。すなわち《私は眠る》<sup>a</sup>（私  
は寝入る）。あるいは、生命運動はよりいっそう著しく減少する。すな  
わち《私は失神する》<sup>b</sup>。

<sup>a</sup> einschlafen, <sup>b</sup> in Ohnmacht fallen.

#### §. 556

不明な外的感覚内容の状態は、身体生命運動が観察されるかぎり  
で覚醒状態とほとんど同じままであるとき、それは《睡眠》<sup>a</sup> であり、そ  
の状態におかれた者は《眠っている》<sup>b</sup>。生命運動も著しく減少してい

る状態は、《失神》<sup>c</sup>（気絶、眩暈卒倒、卒倒、意識喪失）である。生命運動がまったく途絶えることになる状態は、《死》<sup>d</sup>であろう。したがって、睡眠と失神と死は、互いに非常に似ている（§. 265）。

<sup>a</sup> Schlaf. <sup>b</sup> schlafen. <sup>c</sup> Ohnmacht. <sup>d</sup> Todt.

## 訳注

- 1) 第二版で追加された「仮象 (apparitio)」という語が用いられるのは、『形而上学』のなかでこの箇所のみである。形容詞形の *apparens* については、第1部の存在論において、たんにそのように見えるだけで実際にはそうではないことと規定され、「真の (*verus*)」と対置される (§. 12)。 *apparens* は「想像的 (*imaginarius*)」とも言い換えられる (§. 337)。形容詞の *apparens* および *verus* が心理学において用いられるのは、認識 (§. 515) や再認 (*recognitio*) (§. 591)、快・不快 (§. 655) や動機 (§. 691) などに対してである。なおヴァルヒの事典では、*apparitio* は *Erscheinung* に対応するラテン語とされる (Johann Georg Walch, *Philosophisches Lexicon*. 2 Bde., 4 Aufl., Leipzig: Gleditsch, 1775. Reprint, Hildesheim: Olms, 1968, 'Index titulorum latinus')。
- 2) §. 369 では、「この世界は状態をもつ」と主張される。
- 3) バウムガルテンは *Empfindung* というドイツ語を内的および外的感覚 (*sensatio*) に対して用いる (§. 534f.) 一方で、*Gefü[h]* を外的感官のうちの触覚 (*tactus*) に対して用いる。これは当時の用例としては珍しくない。たとえばツェドラーの百科事典でも、*Fühlen* および *Gefühl* に対してラテン語の *tactus* が当てられ、五感のうちの触覚として説明される (Johann Heinrich Zedler, *Grosses vollständiges Universal-Lexikon*. Halle/Leipzig: Zedler, 1732-1754, s.v. "Fühlen, Gefühl")。ヴォルフのテキストでは、通称『ドイツ語形而上学』の §. 223 を参照 (*Vernünfftige Gedancken von Gott, der Welt und der Seele des Menschen, auch allen Dingen ürberhaupt*. 11 Aufl., Halle: Renger, 1751. Reprint, Gesammelte Werke, hrsg. von J. École et al., Abt. 1, Bd. 2, Hildesheim: Olms, 1983)。
- 4) 「構成されたもの (*constituta*)」は、マイアーによる訳では「物体 (*die Körper*)」と訳し変えられる (§. 398; 書誌情報については、「バウムガルテン『形而上学』(第四版)『経験的心理学』訳注——その1——」(以下「訳注——その1——」と略す)の凡例を参照)。だが「構成されたもの」という表現には、認識能力をとおして対象を構成するという側面や、認識する主体の存在が含意されているであろう。
- 5) 「感覚対象」と訳した語は *sentienda* であり、直訳すれば「感覚されるべきものども」である。
- 6) 「より真に、より明瞭に、より確実に」という箇所は、第一～二版では「より明瞭に」とのみ記されている。
- 7) バウムガルテンの用語法では、知覚 (*perceptio*) は表象 (*repraesentatio*) とほぼ同義の広い概念であることに留意されたい。「感覚内容 (*sensationes*)」は感覚能力をとおして得られた感覚与件のみを指すのに

対して、「知覚内容 (perceptiones)」は種々の認識能力をとおして描かれた内容を広く指す。つまり、知覚ないし表象のうちには、感覺能力だけではなく、想像力や記憶力をとおして得られたものも含まれる。本項の「〔それ以外の〕他の個々の知覚内容」とは、感覺能力以外の認識能力をとおして得られたものを指す。表象と知覚については、「訳注——その1——」の訳注4を参照。

- 8) マイアーの『形而上学』(*Metaphysik*, 3. Teil, Halle: Gebauer, 1757, §. 540f.)における説明を参照すれば、本項の記述はより具体的に次のような事態を指すと理解できる。まず前半の8項目については、以下のとおりである。(1)「よく備えられた道具」とは、たとえば起床時に顔を擦ることで、光をより取り込みやすい状態にされた視覚のことである。また、双眼鏡や拡大鏡といった補助器具を使用した場合も含まれる。(2) 或る事物を見たり聞いたりできる場所まで近づくことで、その事物は「感覺の圏域」のなかに置かれる。(3) 或る事物をよく見るために、その事物を適度な距離をとりつつ目の前にもってきたり、弁士の話をよく聞くために、その人の正面に座ったりすることで、それらの対象は「感覺の点」におかれる。(4-5) たとえば或る料理をより美味しく感じるために、「質の点」では塩味をつけることで、「量の点」では適切な程度まで塩を加えることで、味覚はより促進させられる。(6) 音楽は大きな騒音のなかで聴くよりも、一人で静かな場所にいる方がよりよく響く。「より強い異種の感覺内容」とは、この場合の大きな騒音についての感覺を指す。(7) 大人数の集まりのなかで或る一人の人と会話するためには、部屋の片隅に行って他の人たちに注意を払わないようにすればよい。「個々の感覺内容としてはたしかに幾分より弱いものの、しかし多くの感覺内容」とは、この場合の他の人々の声についての感覺内容を指す。(8) 食事中は心配事や学問的考察を思考の外に追いやることで、味覚がより促進される。「全く異種の他の知覚内容」とは、この場合の心配事や学問的考察についての知覚内容を指す。後半の8項目については、以下のとおりである。(1)「感官的道具が妨げられること」とは、眼を閉じたり、対象を「感覺の圏域」の外まで遠く離したりすることである。(2)「感官的道具が少なからず塞がれること」とは、眼を細めたり、耳を手で塞いだりすることである。(3) 感覺対象が「取り去られる」とは、たとえば感覺対象から眼を逸らす場合である。(4) 感覺対象が「小さくされる」例として、マイアーは(視覚対象としての)炎を小さくする場合を挙げるが、視力検査で表示が次第に小さくなっていく場合を想定する方が分かりやすいだろう。(5) 感覺対象が「まったく妨げられて現前しない」とは、たとえば感覺対象としての或る人とまったく会わないようにする場合である。(6) 我々は或る人の声を聞きたくないときに大声

で叫んだり、不味い味を消し去りたいときに塩を口に含んだりする。「より強い感覚」とは、この場合の大声や塩についての感覚を指す。(7-8) 病気のとき、日中は夜間よりも様々なものが見えたり聞こえたりするため、苦しみが和らげられる。また、会話や読書をしているあいだは、病気の苦しみから注意が逸らされる。「妨げられるべき感覚」とはこの場合の病気についての感覚を指し、「個々の感覚内容あるいは知覚内容としてはより弱い、同時にとられたものとしては多くの感覚内容」と「多くの知覚内容」とは、日中に見えたり聞こえたりする様々な感覚内容と、会話や読書のあいだの知覚内容を指す。

- 9) 「連結されたものどもの二項」とは、根拠 (ratio) と帰結 (rationatum) を指す (MT 14)。根拠とは「なぜ或るものが存在するのか、そこから認識されうるもの」であり、根拠をもつその或るものが「帰結」と呼ばれる (ibid.)。「何もも根拠なしには存在しない」(MT 20; 強調省略) という根拠律を存在論の基本原則とするバウムガルテンにとって、存在者は必ず何等かの根拠を持ち (MT 20)、かつ別の存在者の根拠である (MT 23)。世界論の観点からいえば、世界には事物の「普遍的な連結 (nexus universalis)」があり (MT 357)、世界のあらゆる諸部分は世界のなかの一つないし複数の根拠をもつ (cf. Meier MT 317)。つまり根拠と帰結の連結は、世界のうちに客観的に存在する。その一方で、根拠が (人間の認識能力によって実際に) 認識されるものとして定義されるかぎり、連結は主観的なものでもある。バウムガルテンが参照指示する §. 37 では、可能的なものどもがそれ自体で観察されたときに、それらの相関 (respectus) が表象されえないならば、その相関が「関係 (relatio)」である、と定義される。
- 10) 「二重の誤謬」と「第二の場合」という記述については、複数の解釈が可能である。その際、やはりマイアーの『形而上学』による説明 (§ §. 544-546) が参考になる。バウムガルテンは §. 545 において、感官の欺きを [1] 感覚そのもの、[2] 推論、[3] 取り違いによって感覚とみなされた知覚、という 3 つの場合に分けた。他方でマイアーは、感官の欺きをまず [1] 感覚と [2] 他の表象という 2 通りに分け、後者を感覚から導き出された推論 (Schluß) と言い換える (§. 544)。さらにその推論を、[2-1] 理性推論 (Vernunftschluß) と、[2-2] 不明な推論と渾然とした推論 (dunkeler und verworrenener Schluß) とに区分し、後者を「取り違いという過誤 (Fehler des Erschleiens)」とも呼ぶ (ibid.)。つまり、バウムガルテンにおける [3] もマイアーは一種の推論として捉えるのである。さらにマイアーは [2-1] と [2-2] の各々を、誤りが形式にある場合と内容にある場合とに細分する (§. 546)。マイアーの挙げる事例は以下のとおりである。感官の欺きとはたとえば、四角い塔

が遠くから丸く見える、という事態である (§. 543)。理性推論における形式上の誤謬とは、あらゆる丸い物体は遠くから丸く見える、しかるにあの塔は遠くから丸く見える、したがってあの塔は丸い物体である、と推論する場合である (§. 546)。この推論は、媒概念不周延の誤謬に陥っている。理性推論における内容上の誤謬とは、或る物体はそれが遠くから見るとおりの形態をもつ、しかるにあの塔は遠くから丸く見える、したがってあの塔は実際に丸い、と推論する場合である (ibid.)。この推論は、大前提の命題内容が偽である。不明な推論と渾然とした推論においては、我々は感覚を他の表象と結びつけていることを意識しておらず、ただ感覚しか行っていないと思ひ込む (ibid.)。たとえば、或る事物が丸く見えるように思われるからという理由で、その事物は丸いと主張する場合である (ibid.)。以上を踏まえると、[3] の誤謬について述べられた本項の最終文では、「二重の誤謬」は推論の形式と内容とにおける二つの誤謬を指すと解釈しうる。あるいは、判断 (たとえば四角い塔を丸いと主張すること) の誤りと、他の知覚ないし表象 (たとえば丸い塔の表象) を実際の感覚とみなしてしまう誤りのことであるとも解釈しうる。「第二の場合」については、[2] の推論を意味するという解釈と、推論の形式と内容のうちの内容を指すという解釈が可能であるが、本訳注では前者の解釈が適切であろうと考える。

- 11) 「項辞」と訳したものは terminus であるが、これはもともとアリストテレス論理学における ὄρος をポエティウスが訳したもので、命題を構成する論理学的要素である。バウムガルテンによる定義については以下を参照。「表象についての記号は《項辞》 (§. 248 参照。象徴) である。人間の声をとおしてより日常的に用いられる項辞は《言葉 [vocabula]》<sup>a</sup> である。連結された表象内容を意味表示する一連の言葉は、(広義の)《言表 [oratio]》<sup>b</sup> である。<sup>a</sup> Worte. <sup>b</sup> Rede.」 (§. 350) なおマイアーによる独訳では、「項辞」は「或る表象 (eine Vorstellung)」に変えられている (§. 408)。
- 12) 「私が経験する (experior)」という箇所は、第一版のみスモールキャピタルで表記される。
- 13) 『ヨハネによる福音書』20.24-29 を参照。
- 14) 統覚については、「訳注——その1——」の訳注 4 を参照。
- 15) 本項では、時間的に連続している経験のうちに、同一のものとして観察されうる感覚がある場合に、その感覚は新鮮であるがゆえに明瞭性をもつが、その明瞭性は時間の経過とともに失われる、ということが記述されている。マイアーの『形而上学』によれば、たとえば貧しい生活を送っていた者がよい食事にありつけるようになると、食事についての味覚は非常に強い明瞭性をもつが、次第にそうした食事にも慣れ、食事に

ついでに感覚はそれほど明瞭でなくなる、という事態である。我々が鼓動や脈拍や呼吸を普段は意識しないのも、時間とともに明瞭性がかなり弱められたからである。ただしマイアーは、傷の痛みが次第に増すこともあるように、新しさが明瞭性の唯一の源泉であるわけではない、とも付言する (§. 550)。

- 16) 「外的に明瞭に」と訳した「そのように (sic)」は、第一版では「明瞭に (clare)」と記されている。
- 17) 「衝き動かされた精神 (mota mens)」という語は、セネカの『心の平静について』17.10 に用例がある。そこでは、神的狂気なしには偉大なことを成し遂げられない、と主張される。バウムガルテンはセネカのこの箇所との関連を明示していないが、『美学』をみれば明らかなように、彼はセネカの著作（たとえば『怒りについて』や『倫理書簡集』など）に通暁していた。それゆえ本項の「衝き動かされた精神」も、詩作における神的狂気を含意している可能性がある。
- 18) マイアーの『形而上学』によれば、「単純な眩暈」とは回転性の眩暈のことであり、「暗闇の眩暈」とは、目の前が真っ暗になるほどの酷い眩暈のことである (§. 553)。スコトミアは後者の言い換えであり、スコトーマの同義語である。バウムガルテンは全版を通じて scotomia と表記しているが、英訳と独訳は scotoma と訂正している。